

## PROGRAM

**【第1部】** 「独唱」 L'ultima canzone トスティ 歌 茶木 敏行

「ぶちっとJo-9」(小学生による合唱団)と歌おう」

ええじゃないか 城東区♪ リピート山中／作詞作曲

三つの汽車の歌 岩河 三郎／編曲

ふるさと(嵐) 小山 薫堂／作詞 Youth Case／作曲 桜田 直子／編曲

歌・指揮 茶木 敏行 ピアノ伴奏 藤森 伸代

**【第九のお話】** 西村 朗(作曲家)

**【第2部】** ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調op.125「合唱付き」

<第一楽章> Allegro ma non troppo, un poco maestoso

<第二楽章> Molto vivace

<第三楽章> Adagio molto e cantabile

<第四楽章> Presto

指揮 木村 俊明

ソプラノ 尾崎 比佐子 アルト 田中 友輝子

テノール 石川 太一 バリトン 田中 勉

管弦楽 近畿フィルハーモニー管弦楽団 合唱 城東区第九演奏会特別合唱団

## GREETING

本日は、第7回城東区第九演奏会にご来場いただきましてまことにありがとうございます。

今回は、城東区制70周年記念事業としまして、第1部に城東区出身の作曲家で2013年紫綬褒章及び大阪市市民表彰を

受けられた西村朗さんに第九のお話を、また、昨年に引き続き茶木敏行さんとぶちっとJo-9」の皆さんには

「ふるさと城東区」につながる歌をご披露いただきます。

そして、第2部は7回目を迎えました第九演奏会。

演奏会立ち上げ当初よりご指導にもご尽力いただいております木村俊明さんの指揮です。

「城東区ゆめ～まち～未来会議」では、ビジョンの一つである“音楽・芸術による潤いのあるまちの実現”に向けた

取り組みの一つとして第九演奏会を年に一度開催しています。

「第九」は日本では年末のイメージですが、世界では平和への願いやその象徴として演奏されます。

このイベントを通して人と人がつながり、大きな大きな輪になる事を願っております。

最後になりましたが、ご協力いただいております城東区医師会様、城東区商店会連盟様、地域振興会をはじめ

各種団体の皆様のご支援によりこのように開催することができましたこと、深く御礼申し上げます。

どうぞ最後までごゆっくりご鑑賞ください。

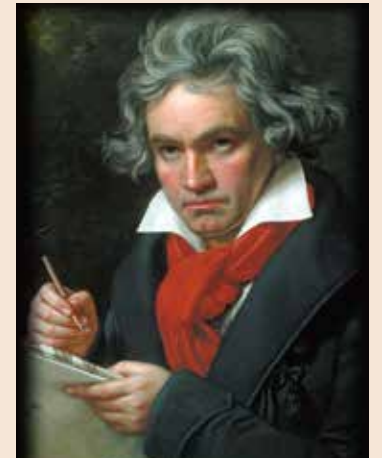
**第7回城東区第九演奏会開催にあたりご寄付(協賛金)をいただいた皆様 ※敬称略**

社団法人大阪市城東区医師会 浦野 嘉子 吉本 元子 島 純子

## 曲目 解説

### ベートーヴェン: 交響曲第9番(合唱付) ニ短調

指揮 木村 俊明



ベートーヴェンがシラーの詞『歓喜に寄す』に感動し、作曲しようと思ったのは1792年のことである。彼は当時22歳であり、まだ交響曲は作曲されていない時期であるが、永きに亘って構想を温めていたことがわかる。そして1815年頃から作曲が開始された。さらにロンドンのフィルハーモニック協会から交響曲の作曲の委嘱を受け、これをきっかけに本格的に作曲を開始した。当初、第4楽章は声楽を取り入れたものは別に作曲を予定していた『ドイツ交響曲』に使用される予定だった。しかし、交響曲を2つ作ることを諦めて統合されて出来たのが第九交響曲である。1824年に初稿が完成したが初演までに何度も改訂され、1824年5月7日に初演。フリードリヒ・ウィルヘルム3世に献上された。

#### 第1楽章

(Allegro ma non troppo, un poco maestoso)

ラとミの無調音から始まり、雨粒がポツリと地上に落ちてくる様子が現されている。その雨粒が段々激しくなり、突然閃光が走り稲妻が轟く。ここで初めてニ短調が表される。次いで第2主題が木管で奏される。地上における英雄的な様々な形態が現されているようである。そしていかにも天使が舞っている様が現され、それがどんどん広がり、ベートーヴェンの力強い形で表現されている。最後のrit.を経てコーダに入り、徐々に強さが増され最後には強い意志が感じられる形でこの楽章が閉じられる。

#### 第2楽章 (Molto vivace)

当時の作曲技法ではこの形式での曲は第3楽章に持ってくるのが常識だが、第4楽章に合唱を入れる考えのため、曲の編成

を変えて作曲された。4小節間の動機が弦楽器によって順番に入ってくる形で奏され、そしてどんどん高揚されフルオーケストラで主題が奏される。そして突然ティンパニーが強音でリズムを表す部分が奏される。当時としてはあまりにも唐突で聴衆はびっくりしたが、その素晴らしさに第2楽章が演奏された後、アンコールを求める拍手が鳴りやまなかったと当時の記録に残っている。トリオでは木管の軽快なアンサンブルから弦楽器に移り、豊かに演奏される。そして、元に戻って最初の部分が演奏され、コーダを通してこの楽章は閉じられる。

#### 第3楽章 (Adagio molto e cantabile)

よく歌うようにとの指示をもって、あまりにも美しく、豊かで甘美なメロディーが奏される。途中ベートーヴェンの愛の表現の最高潮とされている3拍子変化され、より表情豊かにセカンドヴァイオリンとヴィオラで演奏される。中音域でのしっとりとした音楽を奏でている。そしてファーストヴァイオリンが愛のメロディーを豊かに奏され、クラリネットとの掛け合いの音楽が奏されている。その後拍子が8分の12に変化し、益々愛の表現が深められ、二度に渡る最高潮を迎えた後、静かにこの楽章が閉じられる。

#### 第4楽章 (Presto)

突然これまでの音楽を否定するように激しいファンファーレが現れる。それに導かれチェロとコントラバスが話しかけるようにレシタティーボが奏される。ベートーヴェンは今まで奏された各楽章のテーマをこの第4楽章に回顧的に導入し、チェロとバスのレシタティーボによって否定される。そして第3楽章のテーマの後

はそれまで迷っていた気持ちが確信へと変わり、喜びの片鱗がはっきりとした意志として現され、あの有名なメロディーが低音楽器から演奏される。どんどん楽器が重ねられ、高揚しオーケストラ全体で演奏されもう一度ファンファーレが奏された後、バスの独唱が奏される。しかしこの部分は導入に悩んだベートーヴェンが「おお友よこの音ではない！もっとよい調べがある」と自ら作詞し、シラーの詩へと導いていく。そしていよいよ歓びのメロディーが奏される。場面が変わりトルコマーチ風の楽隊が遠くから近づいて来て、テナーのソロでもって英雄のごとくに駆けぬこうと歌い、男声合唱がそれに応える。そして歌い終わるとオーケストラが激しく演奏する。いかにも地上における苦悩、争いを表しているかのようだ。そして「全世界の人々が兄弟となる」シラーの壮大な目標の元に第九で一番有名な部分が奏される。その後場面は変わってゆったりとしかも威厳を持って神の存在を示す部分に入る。神の存在を強く感じていたベートーヴェンの魂がこもっている部分でもある。宇宙的・幻想的な場面として奏される。そして突然二重フーガに入る。ベートーヴェンの作曲技法の素晴らしさがみごとに表されている。いよいよ第九もエンディングに入る。軽快な前奏からソリストが「楽園からの乙女よ 歓べ」と歌い始め高揚していく中、コーラスがそれに応え音楽の中に入っていく。最後のソリストの詠唱に継がれ「全ての人々は兄弟となる」と歌われ、いよいよ最後へのクライマックスに導かれていく。オーケストラと合唱が高らかに奏され、「歓喜 美しき神々の火花」と叫ぶように歌われこの曲は閉じられる。